

4 . 資本ストック調整

景気動向を左右するのは、民間企業の設備投資である。よって、設備投資の動向を分析することは重要である。

設備投資の動向は、資本ストック調整に左右される。その動向を明らかにするのが資本ストック調整分析である。

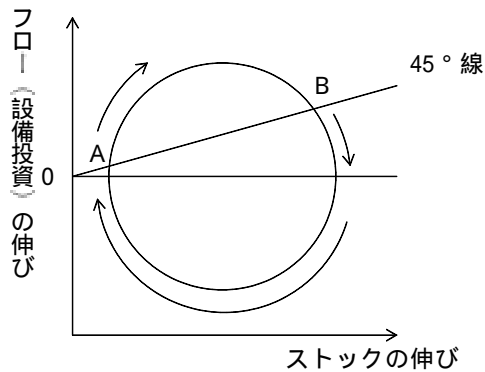
その分析は、資本のフロー（設備投資）とストック（生産設備の合計）で見る。

企業 { 目標生産水準に見合った「望ましい資本ストック」を考え現在の
資本ストック水準を調整する }



望ましい資本ストックの実現にはタイム・ラグがある。

[資本ストック調整の循環]



A : 景気が改善すると資本ストックを積み増すように、フロー（設備投資）を増加、当初はフローの伸びが、ストックの伸びを上回って、加速度的に高まる。

B : 目標（生産）水準に見合った「望ましい資本ストック」水準に近づく

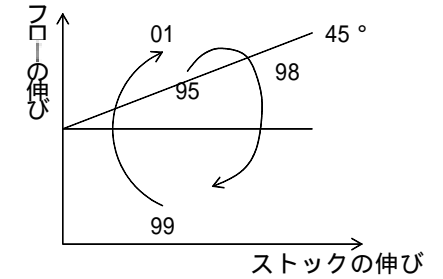
45°線 ⇒ フローの伸び率 = ストックの伸び率 が均衡する

フローの伸び率の鈍化 景気後退の要因 目標生産水準 () ストックの過剰 フローが加速度的に減少

(この B点からA点に至る過程は、ストック調整局面である)

(1) 2000年にストックの積み上がり局面

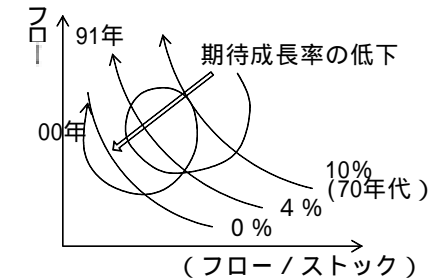
- * 91年末から始まったストック調整は94年まで長く続いた。
- * 95年から景気拡大局面に入ったが98年後半から再びストック調整局面に入った。



(2) 期待成長率とストック調整

- * 70年代前半に左方に大きくシフト
- * 90年代前半にも左方にシフト

このことは、期待成長率が低下していることを意味している。



期待成長率の高まりがみられる場合は、その成長率に見合う水準まで資本ストックを積極的に増加させるため、設備投資の増加がしばらく続くこととなる。しかし、期待成長率の高まりがほとんどみられない現状では、ストック調整局面を脱し設備投資が増加したとしても、すぐに低い期待成長率に見合った資本ストックの水準に達してしまうため、短期間で再度調整局面入りしてしまうことになる。つまり、循環円が小さくなることを意味し、設備投資増加局面が短くなる。このように企業の期待成長率が低下し、企業が日本経済の先行きに悲観的になっていることが、90年代後半以降設備投資の増加が長続きしない1つの重要な要因であると考えられる。

[出所：平成13年経済財政白書]